

介護等体験における学生の自己意識の変化について

Changes in the self-consciousness of students in Nursing Practice

佐藤 幸江

Yukie SATO

〈要旨〉

本学においては、教員免許法の特例により「教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する観点から、小学校又は中学校の教諭の普通免許状の授与を受けようとする者に、障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験」⁽¹⁾を実施している。「介護等体験」は、体験すること自体を中心に評価しがちであるが、学生の体験している介護することの喜びや難しさ、自己の新たな発見等の内向きの視線にも注目しなければ、本来の目的を達成することはできないと考える。

本研究においては、介護等体験の中で学生が感じる自己意識のゆらぎを検討する。ゆらぎの起きる状況、その要因を描き出すことで学生の援助的な人間関係の能力形成を把握し、本学における事前・事後指導と受入側の各学校・施設における体験とが、より有機的に結び付くような体制へと改善を加えていければと考える。

本年度の介護等体験を終えた学生のデータを基に、自己意識のゆらぎに関する28のエピソードが抽出でき、「(1)2者の関係性の構築 (2)自己と向き合う「日誌」の役割～自己を分析的に見る～」というカテゴリーを得ることができた。

〈キーワード〉

自己意識 介護等体験 事前・事後指導 教師教育

1 はじめに

1997（平成9）年に制定された「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」により、小学校中学校の教諭の普通免許状を取得するために、「介護等体験」が義務づけられた。本学においても、5日間の社会福祉施設での体験、2日間の特別支援学校での体験を実施している。

学生は、「義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ、教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する観点から」⁽¹⁾、これらの場所において「障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験」を行っている。

ここでは、学生が、障害者や高齢者等との交流・介護・介助等を通して、価値観の相違や地域社会での共生等を学び、「自己意識」の変容を感じる事が大切である。そのためには、大学側において、このような与えられたプログラムではあるが、より充実した教師教育のプログラムとするために、事前・事後指導と受入側の各学校・施設におけ

る体験とが、有機的に結び付くように体制を整えていく必要がある。

そこで、本稿においては、学生の記録をもとに自己意識にゆらぎの起きる状況、その要因を描き出すことで、学生の援助的な人間関係の能力形成を可能にする介護等体験の指導、運営体制を改善していく必要があると考えた。

なお、本稿では「自己意識」を梶田の考え方に沿って次のように定義する。「人が、自らの身体的あるいは精神的特性、社会的な関係や役割などをめぐって自分自身に対して持つ、今、ここでのイメージや気づきであり、時間とともに変化するもの」⁽²⁾である。

2 研究の目的

介護体験等の実習の中で学生が感じる自己意識の変化を検討する。「変化」の起きる状況、その要因を描き出すことで、学生の援助的な人間関係の能力形成を考える上での手がかりとする。

3 研究の方法

3-1 研究の対象

教員免許を取得したいと考えている学生58名が、58施設において5日間の介護等体験を実施した。2日間の特別支援校・ろう学校での体験を実施しているが、あまりに体験の期間が少ないため、本稿では、5日間の介護等体験を研究の対象としている。

日々の記録としての「日誌」と体験後の「反省レポート」に、単に体験レベルから、利用者や介護担当者とのコミュニケーションを通して、一人一人の介護・介助の在り方への気づきを深めている学生10名をアトランダムに抽出した。

3-2 抽出した学生のプロフィール

抽出した学生のプロフィールは、「表1」のようになる。

【表1：分析対象となった学生のプロフィール】

	体験施設	体験内容	担当者記述
A	障害者福祉施設	作業補助 バーベキュー	なし
B	生活介護施設	食事・入浴の介助 送迎	なし
C	生活介護施設	日常生活の介助 清掃	なし
D	デイサービス	食事・入浴介助 レク	1日分あり
E	デイサービス	食事・入浴介助 レク 送迎	5日分あり
F	デイサービス	食事・入浴介助 レク 清掃	なし
G	デイサービス	食事・入浴介助 体操 レク	5日分あり
H	デイサービス	食事・入浴介助 レク 送迎	2日分あり
I	デイサービス	食事・入浴介助 レク 送迎	3日分あり
J	デイサービス	食事介助 レク 清掃	なし

3-3 データの収集と分析方法

(1) 収集したデータ

事前指導の際に、「事前課題」として「実習で学びたいこと」「実習に対する不安」「自己の性格の分析」を記述すると共に、5日間の「日誌」には「実習で何を学んだか」「実習前の不安はどのようになったか」を記述するように指示をした。

これらの記録から得られたデータに関しては、本研究以

外の目的に使用しないこと、また実習の評価とも無関係であることを口頭にて説明した。

(2) データの分析

- ① 5日間の「日誌」の記述から自己意識の変化に焦点をあわせて場面、エピソードを抽出する。
- ② 抽出された場面、エピソード毎に「事前課題」での記述とあわせ解釈する。
- ③ ①②に見出しをつけ、関連すると思われる群毎に分類する。
- ④ 内容を記述する。

4 研究の結果

自己意識のゆらぎの起きる状況と要因として、その内容を記述すると以下ようになる。

4-1 2者の関係性の構築

① 利用者の方との関係性

介護等体験の日程・体験場所も自己の希望のままにならない。まして、小さな施設が多いため、受け入れてもらえる人数が一人の場合が多い。となると学生は、5日の間自分一人で様々な問題に対応していかななくてはならず、10名中10名が行く前の「不安・戸惑い・緊張」を異口同音に記述している。特に、日頃から消極的なAは、「初めて顔を合わせた時には、緊張のあまりどのように声をかけてよいのか悩み、皆さんと話すことができなかった」と記述している。しっかりしていると自分を評価したBも「初めは、施設に通われている方々と、仲良くできるか不安であった」と記述している。どのような態度で接し、どのような言葉がけをすればよいのか悩む姿が浮かび上がってきた。

しかし、これらの「不安・戸惑い・緊張」が解消される場面がある。10名中10名が「利用者の方々のありがとうの言葉」「笑顔」に出会う場面であったと記述している。初日、Bは、車いすを動かすとき、ご飯を配膳したときに、Dは、ちょっとした一言をかわすことでつながりができ、笑顔を返してくれたときのうれしさを、Eは、スタッフの方々の対応を観察して、それをまねるようにして話しかけていくうちに、お孫さんの話や昔のことなど話題が広がり、介助すると「ありがとう」という言葉がいつも返ってくることの喜びを、それぞれ記述している。

これらの記述から、体験の前半は、学生の方が施設利用者の方々にサポートされている、コミュニケーションも利用者の方々が学生を気遣い、円滑にしている場面が多いことが推測される。

後半の3・4日目に入ると、仕事のルーチンを把握することができ、個別の接し方に関する情報もある程度見極めてきたことで、積極的に利用者の方々にコミュニケーションをとる記述が多くなる。Fは、「足が痛いと言っている

利用者の方の足をなでると『ありがとう、ありがとう』と言ってくれた。すごく心が温かくなり、ありがとうという言葉はとてもいい言葉であると実感しました。私も年をとってもこの言葉を使える人でありたい」と記述している。Gは、「来週はもう会えなくなる利用者の方が『ありがとうねえ。また、会いましょう』と言ってくれたことが本当にうれしかった」と記述している。

今年度の学生の記述はポジティブなものが多い。例えば、どのような利用者についても、同じスタンスで付き合わなければならないという対人関係のルールを持っている学生が、関係を回避するような利用者の存在をどのように感じたのか、このようなときに自分をどのように意識したのか等、深いゆらぎに関する記述は見られなかった。5日間という期間の短さによる関係構築の浅さであるのか、利用者側に配慮があるのか等推測される。自己を否定するような深いゆらぎを体験した学生に対しては、事後指導において状況を検討して合理的な思考を示し、認知がどのようにゆがんでいるかを指摘することで、自己批判的な自動思考を再考するよう学生に促す必要が出てくると考える。

② 介護担当者の方との関係性

「日誌」に毎日指導や助言を記述している担当者が2名。部分的に記述している担当者が3名と半数である。この数をどのように考察するか微妙な数である。介護者の多忙化を考慮すると、受け入れ側に無理をお願いできない部分であろう。

そのような担当者との関係の構築に関して、学生がとっている行動は「観察」である。これは、10名中10名が記述している。Cは、「おしゃべりの好きな方、静かな方、スタッフの方々の対応はその人に合わせていた」また、「少しの変化でも気にかけて声をかけ、利用者さんが安心して過ごせる環境を作っていた」と記述している。Jは、トイレの排泄に関する介助において「排泄があったかどうかを職員同士で伝え合う方法として表を利用しており、口頭でいわないように配慮されていた。自分たちが嫌に感じることを、恥ずかしいと思うことは、利用者の方にしないように気を配っている」と記述している。このように、観察によって介護・介助の場面を理解し、担当者の方から仕事内容を理解したり姿勢を学び取ったりしている様子がある。

C・D・G・I・Jの5名は、より積極的に担当者にアプローチしている様子が見られた。デイサービスに来る方は話を聞いてもらいたがっているので、同じ話でも聞いてあげてほしいこと、一人一人への対応が大事で「できること、できないこと」をよく観察したりちょっとした話を聞いたりして「できないこと」を見極めて介助を行うこと、看護師・介護福祉士・ケアマネージャー等様々な職種がチーム

で動いていること等の有用な情報を得ている。

特に、これまであまり介護の仕事に関心がなく、認知症の祖母との関わりから介護体験に関して否定的な見方をしていたJが、大きな自己意識のゆらぎを体験している。「わたしの祖母は認知症で意思疎通が全くできず、老人に対して関わりたくないという偏見をもっていた。しかし、今日一日の体験を通して考えが大きく変化した。お互いがどうすればよいか分かっていないために、対応がごちなくなってしまうこと、相手は、気もちは元気でも体がついてこないけれども、自分はそれ状況を理解しがたいこと。職員の方々は、相手の混乱を和らげるように優しく接していた。みなさんに触れると肌は冷たく、ふにふにしている心地よかった。もっと触れ合ったり、コミュニケーションをとっていこう」と、積極的な記述で1日目を終えている。あきっぽい性格のJが、毎日の「日誌」に、行間いっばいに体験を記述し様々な自己の感情を表出している。最終日には、利用者や職員の方々への感謝の言葉を記述している。これまでレポートの提出も滞りがちであったJが、体験後の「反省レポート」に関しては期日を守って提出している。このような変化は、事後指導で共有化するだけでなく、ゼミの担当者等と連絡をとり合い、Jの今後の意識や行動に着目しよりプラス思考になるようなサポートをする必要があると考える。

4-2 自己と向き合う「日誌」の役割

～自己を分析的に見る～

今回のデータは「日誌」からも収集している。このプロセスレコードに、感じたことや考えことを記述できる学生とそうではない学生が見られた。

4-1で述べたように、利用者や担当者との関係を通して学生達は「自己と向き合う」ことになる。体験を通して自己の感情を表出し、自己と向き合う時間として「日誌」を活用できればと考える。

前述の消極的なAは、利用者の過去を知る機会を得て「バイクの事故で脳に障害を負った方、ダウン症の方、リストラされた方等聞いていて心が痛みました」と記述している。それらの方々が明るく笑顔で、今を楽しんでいる様子を見て、Aも「笑顔にさせてもらった」と記述している。これは、「本当の感情を隠して表向きの顔をとってつくる感情作業」をやらざるを得なかったのであろう。このような自己呈示（self-presentation）の仕方は、仮面的自己呈示³⁾である。Aは、それを意識しているのではなく、素直な性格から利用者の方々の気持ちを察し、その場の自分を演じたのであろう。

多様な対人関係を生きなければならない現代人は、仮面性を意識しないまま自己を表出しているために、自分の本

当の姿を見失いがちであると言われている。仮面的自己呈示のような微妙な問題に関しては、大学側の担当者の立場にあるもの（本学においては筆者）が、学生の感情を敏感にとらえ、事後指導等で話を必要があろう。

また、学生の間でリーダー的な存在であるHは、「日誌」に「～できました」「～分かりました」という単なる体験レベルの記述が多く見られる。感情の表出や自己を深く見つめるような記述が見られない。気になることで心がいっぱいになったとき、置かれた状況に問題があると意識されたとき、これまでの思考や行動が通用しない事態に陥ったとき等に、人は振り返りを行う。Hは、利用者や担当者の方々との関わりにおいて、そこまで積極的な関わりを行わなかったのであろうか。あるいは、関わりはあったが、利用者や担当者の方々の立場に立って状況を意識するということを行わなかったのであろうか。いずれにしても、推測の域をでないが、これまでリーダーとして振る舞ってきたHにとって、この体験が自己意識の変化につながらなかったとしたら、何らかの不安定さがあるから、今後のHの大きな課題となるといえよう。「反省（reflection）とは、物事を私と関連づけてみることであり、「関心の方向が他者から自分へ、外から内へ転じること」によって人は反省し始める。」⁽⁴⁾「日誌」をそのようなりフレクションのツールとなるよう事前指導の必要性がある。

5 終わりに

以上のようなことから、成果と本学における課題が見えてきた。

5-1 不確定な状況が自己意識を変容させる

不確定な状況に陥ったときに、反省によってエゴとセルフが分離⁽⁵⁾し、私が私に持つイメージや気づきが揺れ、変化すること、すなわち自己意識の変化へとつながることが明らかになった。援助的な人間関係は、このような中で芽生え、育まれていく。その学生の自己意識の揺れや変化は、学生の個性やこれまでの育ちに負うところがある。事後指導において、体験や感じたことを交流する等、仲間との相互作用の場の設定が必要となろう。

本研究で描き出した介護等体験における学生の自己意識の揺れ、変化の状況、要因は、今後の指導を考える上で多くの示唆を与えてくれたと考える。

5-2 本学における介護等体験をより充実したものにするために

毎年、施設もそこに行く学生も違うため、施設と連携していくことは無理があろう。大学側において、より充実した教師教育のプログラムとするためには、まず、事前・事後指導を改善していくことが挙げられるよう。

例えば、自己と向き合う時間を作るプロセスレコードとしての「日誌」の存在は大きい。事前指導において、体験したことを記述するだけでなく、気になることが起こったとき、置かれた状況に問題があると意識したとき、これまでの思考や行動が通用しない事態に陥ったときに、自分の感情を素直に表出し、立ち止まって考えてみることの大切さを強調し、しっかりと記述していくよう指導する必要がある。

また、事後指導においては、体験や感じたことを交流する等、仲間との相互作用の場の設定等、考えていく必要がある。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省（平成9年）小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律等の施行について
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19971126001/t19971126001.html
- (2) 梶田叡一「自己意識の心理学 [第2版]」（1988）東京大学出版会
- (3) 武井麻子「感情と看護」（2001）医学書院
- (4) 村本詔司「セルフは存在するか」（1993）梶田叡一編『現代のエスプリ』
- (5) 野村一夫「リフレクションー社会的な感受性へ」（1994）文化書房博文社